

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：16201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770149

研究課題名(和文) キリマンジャロ・バンツー諸語における構造類型的な内的多様性の記述と分析

研究課題名(英文) Linguistic description and analysis on internal typological variation in Kilimanjaro Bantu languages

研究代表者

品川 大輔 (Shinagawa, Daisuke)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号：80513712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、タンザニア北東部、キリマンジャロ山周辺で話されるキリマンジャロ・バンツウ諸語(KB)の文法記述を行うとともに、同諸語内部に見られる構造レベルの類型的多様性を明らかにし類型間関係を分析することを目的とした。研究期間内における主たる成果としては、i) それまで未記述であったチャガ＝ロンボ語の文法スケッチおよび語彙集の刊行、ii) KBの内的類型的多様性に関する学術論文の出版、iii) 国際会議(世界アフリカ言語学会議)における研究発表、等を挙げることができる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to provide linguistic description of under-described Kilimanjaro Bantu (generally known as Chaga) languages spoken on the slopes of Mt. Kilimanjaro and typological analysis of morphosyntactic variation found in this language group. Major achievements accomplished through this study include publication of a reference grammar of Chaga-Rombo (Bantu E623) and papers (including those presented in international conferences) on group-internal typological variety of Kilimanjaro Bantu languages, etc.

研究分野：言語学

キーワード：形態論 形態統語論 統語論 類型的多様性 バンツー諸語 キリマンジャロ・バンツー諸語(チャガ語)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を構想した経緯は、次のようなものであった。

報告者は、研究代表者として2010年度から3か年にわたって科研費助成事業「未記述のキリマンジャロ・バンツー諸語に関する横断的文法記述研究」(若手研究(B), 課題番号22720158)を遂行した。同プロジェクトにおいては、キリマンジャロ・バンツウ諸語(以下KB)における動詞構造内の時制・アスペクト・モダリティ(TAM)形式の言語間対応を明らかにするとともに、言語間に見られる形式-概念の連鎖的対応が示唆する変化の方向性の問題についても新知見を提示した。しかしながら、この研究で扱ったのはあくまでも動詞構造の一部にかかる現象であり、KBの類型的多様性を明らかにするためにはより上位の構造についての分析が不可欠であるという認識に至った。このことが、(動詞構造全体や句、文といった)より大きな構造体におけるKB内部での類型的多様性の記述と類型間関係を規定する原理の分析という本研究課題着想に至る第一の、また直接的な契機であった。ここで「より大きな構造体における類型的多様性」とは、例えば次のようなことを指す。バンツウ諸語内の類型論においては、動詞適用形構文(applicative constructions)に典型的に見られる目的語対称性(object symmetry)に関して、次のような二類型が提唱されてきた(Hyman and Duranti 1982); i) 複数の名詞項が目的語として同等の形態統語論的な地位を有する目的語対称型言語(symmetric language, SL), ii) 限定的な項のみにしか目的語としての文法的な資格を与えない目的語非対称型言語(asymmetric language, AL)。この類型に照らし合わせれば、KBは概ねSLのタ

イプに分類できるが、詳細にデータを分析したとき、KB内部に有意な類型差が認められるのみならず、項の意味役割といったよりミクロなファクターによって類型的な振る舞いに差異が生じるといった現象を確認することができる。研究課題にある「構造類型的な内的多様性」とは、こういった構造レベルのKB内部での類型的多様性を指すものであり、こういった現象を対象とした分析が本研究課題の中心的なテーマということになる。

さらに、研究開始時におけるバンツウ語学(のみならずアフリカ言語学全体)における関心事として、「言語領域としてのアフリカ(Africa as a linguistic area)」(cf. Heine and Nurse 2008)という視点からの、Greenberg流の四大語族分類の批判的検討と再構築という試みがあった(Hombert and Philipsson 2009)。本研究課題が扱うKBは、周辺の本バンツウ諸語との対比において、構造的また語彙的に特異な性格が見出されることから、本研究課題の発展的課題として、KBが定着する以前の言語的基層の問題もアフリカにおける語族分類の再検討という文脈に照らし合わせつつその射程に含んでいた。

2. 研究の目的

上述のとおり、本研究の第一の目的は、KBの内部に見られる、主に形態統語レベルでの構造的な多様性を記述し、類型論的な基準を用いて一貫した分析を行うことであった。KBはもとより比較言語学的に同系であり、分岐年代もさほど古くないことが推定されているが、属する言語間の形式的な差異が顕著であることが夙に知られている。現地調査で得られた一次資料をもとに、現在見られる構造的な多様性が生じた通時的なプロセスの解明

を目指すとともに、昨今アフリカ言語学で注目を浴びている伝統的な系統分類の再検討といった大きな問題を捉えるうえでの足がかりをつけることも視野に入れていた。

また研究計画段階において、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下AA研）の言語研修の講師を報告者が担当すること、またアフリカ言語学研究における世界最大の国際会議である世界アフリカ言語学会議（World Congress of African Linguistics, 以下WOCAL）が京都大学で開催されることが、それぞれ研究期間内に予定されていたことから、これらの機会において具体的な成果発信を行うことも、本研究課題の枠内で達成すべき目標として位置付けていた。

3. 研究の方法

本研究は、記述言語学的方法に基づく言語調査によって得られた一次資料に基づいて遂行された。ただし、通常の調査と異なり、上述の言語研修におけるネイティブ講師をコンサルタントとした集中調査を含むため、必ずしも話者コミュニティにおいて遂行したものばかりではない。研究期間内に行った調査は、次の四回である。

(1) 2013年8-9月：ダルエスサラーム市およびタンガ州タンガ市にてロンボ語調査（「4. 研究成果」の項目(1)を参照）。

(2) 2014年3月：キリマンジャロ州ロンボ県にてロンボ語調査

(3) 2015年2-3月：キリマンジャロ州ロンボ県にてロンボ語調査

(4) 2015年9月：キリマンジャロ州ロンボ県にてロンボ語調査

これらに加え、(1) と (2) の間に、言語研修のネイティブ講師を依頼した

Monica Moshiro Apolinari氏

（Eckernforde Tanga University, 助教）を日本に招へいし、とりわけ声調及び語彙に関する補足的な集中調査を行った。

4. 研究成果

本研究課題の主たる成果は、次の五点到にまとめることができる。ちなみに、(1-2) は 2013 年度の成果、(3-4) は 2014 年度の成果、そして (5) は 2015 年度の成果である。

(1) AA 研言語研修「チャガ＝ロンボ語」を念頭に置いたロンボ語集中調査：文法書執筆を含む言語研修実施準備のために、研修のネイティブ講師を務める Monica Apolinari 氏と、四回にわたるロンボ語の集中的な言語調査を行った（「3. 研究の方法」の項における (1-3)、および Apolinari 氏を日本に招聘しての調査）。音韻論、音調論、形態論、統語論の各領域を網羅的に扱ったこの調査によって、言語研修を遂行する上での基本的な準備を整えるとともに、ロンボ語の文法体系の概略を整理することが可能になり、以下 (3) に挙げる文法書の刊行につながった。

(2) ロンドン大学東洋アフリカ研究院（School of Oriental and African Studies, University of London, 以下 SOAS）における国際ワークショップにおける研究発表：2014 年 3 月に SOAS で行われた International Workshop on Bantu Languages は、バンツー諸語内部の類型論的な Micro-variation を主要テーマとして行われた。本ワークショップでは、"Vowel Coalescence and Morphological Micro-variations in Kilimanjaro Bantu" と題した研究発表を行い、SOAS、ケンブリッジ、さらにはダルエスサラーム大学等の国際色溢れ

る研究者から多くの有益なコメントを受けた。また、本研究課題についての議論も行い、成果発信および情報交換の面で有意義な成果を上げることができた。

(3) AA 研言語研修「チャガ＝ロンボ語」の実施と、ロンボ語の文法スケッチおよび語彙集の出版：本研究課題の成果発信の面での中心的な事業である言語研修「チャガ＝ロンボ語」を実施し、成功裏に終了した（同研修のレポートは、<http://www.aa.tufts.ac.jp/ja/training/ilc/ilc-list/20141> で確認することができる）。また研修成果物としての『チャガ＝ロンボ語 (BantuE623) 文法スケッチ』および『チャガ＝ロンボ語 (BantuE623) 基礎語彙集』を刊行した。これは、同言語についての初めての reference grammar ということになり、KB 諸語記述研究の資料的空白を埋める成果と言える。

(4) KB の内的類型的多様性に関する欧文論文の出版：2014 年 3 月の SOAS における研究発表 (2) をもとに、得られたコメント等を反映する形で、“Vowel length and TMA micro-variation in Kilimanjaro Bantu”と題する論文を AA 研の査読誌 *Asian and African Languages and Linguistics* に投稿し、採択された。国際ワークショップで得られた学問的知見を、さらに論文化して発信したという点で、本研究課題における重要な成果に位置付けられる。

(5) 国際会議における研究発表：言語研修同様、本研究課題の構想段階ですでに成果発信の場として想定していた WOCAL において研究発表を行った。本研究課題によって得られた成果をまとめるとともに、バントゥ諸語全体を見据えた類型的多様性研究という、次の研究テーマへの布石となる成果であり、それを踏まえる形で、2016 年度開始の AA 研共

同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ 1)」といった新たなプロジェクトが展開している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

品川大輔 (2013) 「アフリカの言語動態および都市言語に関する研究の動向—日本のアフリカニストの業績を中心に—」, 香川大学経済論叢 86(2), 307-318 (2013 年 9 月発行, 査読なし)

Shinagawa, Daisuke (2015) “Vowel length and TMA micro-variation in Kilimanjaro Bantu”, *Asian and African Languages and Linguistics* Vol.9, pp.5-21 (2015 年 3 月 31 日発行, 査読あり)

[学会発表](計 3 件)

Shinagawa, Daisuke, “Vowel Coalescence and Morphological Micro-variation in Kilimanjaro Bantu”, International workshop on Bantu languages: Studies in East African Bantu and Microvariation, SOAS, University of London; London, UK (2014 年 3 月 1 日開催, 査読なし, 参照 URL: <https://www.soas.ac.uk/linguistics/events/01mar2014-international-workshop-on-bantu-languages-studies-in-east-african-bantu-and-microvariation.html>)

品川大輔 「チャガ語群における前倚辞 *ni=* の言語間対照のための試論」, アフリカ言語学研究会 (Aflang), 京都大学; 京都市 (2015 年 3 月 29 日開催, 査読な

し)

Shinagawa, Daisuke, “A tentative analysis on typological microvariation in Kilimanjaro Bantu”, 8th World Congress on African Linguistics, Kyoto University ; 京都府京都市 (2015年8月21日開催, 査読あり)

〔図書〕(計3件)

品川大輔 (2014) 『チャガ = ロンボ語 (BantuE623) 文法スケッチ』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.142 (2014年10月30日発行)

品川大輔, モニカ・アポリナリ (2015) 『チャガ = ロンボ語 (BantuE623) 基礎語彙集』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.69 (2015年1月13日発行)

品川大輔 (2014) 「都市言語」, 日本アフリカ学会(編) 『アフリカ学事典』, 昭和堂, pp.110-113 (2014年6月発行)

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

品川 大輔 (SHINAGAWA, Daisuke)

香川大学・経済学部・准教授

研究者番号 : 80513712